

II 熱環境 2 室温と熱負荷（教科書 pp.54～59）
II 熱環境 3 断熱と気密と結露（教科書 pp.60～64）

0．前回の復習

壁体を貫流する貫流熱量（熱貫流量）は

$$\{ \quad \quad \quad \} = \{ \quad \quad \quad \} \times \{ \quad \quad \quad \} \times \{ \quad \quad \quad \}$$

で表すことができた。

また，〔熱貫流率〕の逆数を〔熱貫流抵抗〕と言った。

【補足】

総合熱伝達率は，

$$\{ \text{総合熱伝達率} \} = \{ \quad \quad \quad \} + \{ \quad \quad \quad \}$$

である。

1．今日の目標

- 1) 室内外の熱の出入りの様子を理解しよう。
- 2) 湿った空気と結露について知ろう。

2．室内外の熱の出入りと室温

2.1 室温の変動

室温：気象や室内発生熱の影響（「 」）を受けて変動。

 ：外乱により生じた熱で室内に入る熱

 ：外乱により生じた熱で室内から出る熱

定常状態： 的に変化しない状態（十分に時間が経った後の状態）

非定常状態： 的に変化する状態（ 的な状態）

時間的な遅れが問題

2.2 定常状態の熱平衡と室温

定常状態の時、室内外の熱の出入りは、以下のように書くことができる。なお、熱量の単位は [W] である。

$$\{ \quad \quad \quad \} + \{ \quad \quad \quad \} + \{ \quad \quad \quad \} = \{ \quad \quad \quad \} + \{ \quad \quad \quad \} + \{ \quad \quad \quad \} + \{ \quad \quad \quad \}$$

これをきちんと式の形で表すと、

$$q_{SR} + q_I + H = q_W + q_G + q_{INF} + q_{IW} \tag{10}$$

となる。（なお、式の番号は、教科書 p.55 の図 2 - 2 中の番号と一致させてある）

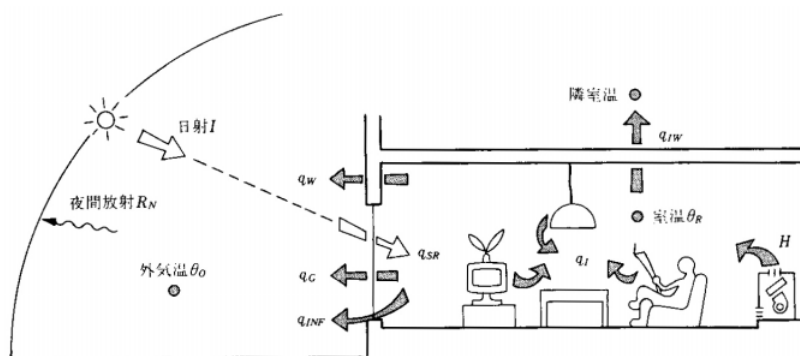


図 種々の外乱が作用するときの暖房質の定常熱平衡（教科書 p.55 図 2 - 2）

それでは、一つずつ内容を検討してみよう。

$$\{ \quad \quad \quad \} = \{ \quad \quad \quad \} \times \{ \quad \quad \quad \} \times \{ \quad \quad \quad \}$$

$$q_{SR} = t_G A_G I \tag{8}$$

q_{SR} : 窓透過日射熱取得 [W]

t_G : ガラス窓日射透過率 [単位なし] ガラスを通して日射が透過してくる割合

A_G : 窓面積 [m²]

I : 屋外面の全日射量 [W/m²]

$$\{ \quad \quad \quad \}$$

q_I : 内部発熱熱取得 [W] 照明や機器類, 人体からの発熱

{ _____ }

H : 暖房熱 [W] この熱が常に供給されるので, 室温が一定に保たれる

{ _____ } =

$$\{ \text{_____} \} \times \{ \text{_____} \} \times (\{ \text{_____} \} - \{ \text{_____} \})$$

$$\{ \text{_____} \} = \{ \text{_____} \} + \{ \text{_____} \}$$

$$\{ \text{_____} \} = (\{ \text{_____} \} \times \{ \text{_____} \} -$$

$$\{ \text{_____} \} \times \{ \text{_____} \}) / \{ \text{_____} \}$$

$$q_w = K_w A_w (q_R - SAT_w) \tag{1}$$

$$SAT_w = q_o + Dq_w \tag{2}$$

$$Dq_w = \frac{a_w I - e_w R_N}{a_o} \tag{3}$$

q_w : 外壁貫流熱損失 [W]

K_w : 外壁熱貫流率 [W / m² · K]

A_w : 外壁面積 [m²]

q_R : 室温 []

SAT_w : 外壁の相当外気温 [] 教科書 p.90 も参照のこと

q_o : 外気温 []

Dq_w : 外壁の相当放射温度 []

a_w : 外壁の日射吸収率 [単位なし]

I : 屋外面の全日射量 [W / m²]

e_w : 外壁の放射率 [単位なし]

R_N : 屋外面の夜間放射量 [W / m²] 教科書 pp.95 ~ 96 参照

a_o : 外表面総合熱伝達率 [W / m² · K]

{ _____ } =

$$\{ \text{_____} \} \times \{ \text{_____} \} \times (\{ \text{_____} \} - \{ \text{_____} \})$$

$$\{ \text{_____} \} = \{ \text{_____} \} + \{ \text{_____} \}$$

$$\{ \text{_____} \} = (\{ \text{_____} \} \times \{ \text{_____} \} -$$

$$\{ \text{_____} \} \times \{ \text{_____} \}) / \{ \text{_____} \}$$

$$q_G = K_G A_G (q_R - SAT_G) \quad (4)$$

$$SAT_G = q_o + Dq_G \quad (5)$$

$$Dq_G = \frac{a_G I - e_G R_N}{a_o} \quad (6)$$

q_G : 窓貫流熱損失 [W]

K_G : 窓熱貫流率 [W/m²·K]

A_G : 窓面積 [m²]

q_R : 室温 []

SAT_G : 窓の相当外気温 [] 教科書 p.90 も参照のこと

q_o : 外気温 []

Dq_G : 窓の相当放射温度 []

a_G : 窓の日射吸収率 [単位なし]

I : 屋外面の全日射量 [W/m²]

e_G : 窓の放射率 [単位なし]

R_N : 屋外面の夜間放射量 [W/m²]

a_o : 外表面総合熱伝達率 [W/ m² K]

$$\{ \text{ } \} = \{ \text{ } \} \times \{ \text{ } \} \times \{ \text{ } \} \times (\{ \text{ } \} - \{ \text{ } \})$$

$$q_{INF} = C_p r V (q_R - q_o) \quad (7)$$

q_{INF} : 隙間風熱損失 [W]

C_p : 空気の比熱 [J/g·K] 1gの空気の温度を1K上げるのに必要な熱量

r : 空気の密度 [g/l]

V : 隙間風量 [l/s]

q_R : 室温 []

q_o : 外気温 []

$$\{ \text{ } \} =$$

$$\{ \text{ } \} \times \{ \text{ } \} \times \{ \text{ } \} \times (\{ \text{ } \} - \{ \text{ } \})$$

$$q_{IW} = K_{IW} A_{IW} f (q_R - q_o) \quad (9)$$

q_{IW} : 内部貫流熱損失 [W]

K_{IW} : 内壁熱貫流率 [W/m²·K]

A_{IW} : 内壁面積 [m²]

f : 隣室温度差係数 [単位なし] 非暖房隣室の室温を正確に推定するのは難しいため、
便宜的に、屋外との温度差に係数を乗じて推定する。

q_R : 室温 []

q_O : 外気温 []

(10) 式に、(1) 式、(4) 式、(7) 式、(8) 式、(9) 式を代入して、暖房熱 H について整理すると

$$H = K_r (q_R - q_O) - (q_R - q_I) \quad (11)$$

ただし

$$K_r = K_W A_W + K_G A_G + C_P r V + K_{IW} A_{IW} f \quad (13)$$

$$q_R = q_{SR} + K_W A_W Dq_W + K_G A_G Dq_G \quad (14)$$

K_r : _____ [W/K] 室温を外気温に対し 1 K 高く保つために必要な熱量

q_R : 日射と夜間放射による室内熱取得 [W]

同様に、室温 q_R について整理すると

$$q_R = q_O + \frac{H + q_R + q_I}{K_r} \quad (12)$$

日射熱と内部発熱には暖房効果あり。室温上昇効果は、熱損失係数 K_r が小さいほど大きい。

ただし

$$K_r = K_W A_W + K_G A_G + C_P r V + K_{IW} A_{IW} f \quad (13)$$

$$q_R = q_{SR} + K_W A_W Dq_W + K_G A_G Dq_G \quad (14)$$

K_r : 熱損失係数 [W/K]

q_R : 日射・夜間放射による室内熱取得 [W]

2.3 非定常状態の熱平衡と室温

- ・室温変化 家具類や周壁の温度も変化 家具類や周壁への吸熱が起きる 定常状態になると吸熱量はゼロに
- ・室熱容量：室温を 1 K 上昇させるために必要な総吸熱量
- ・非定常状態では、この吸熱も効果の考慮する必要がある。

教科書 pp.55 ~ 57 参照

3. 結露

3.1 結露とは

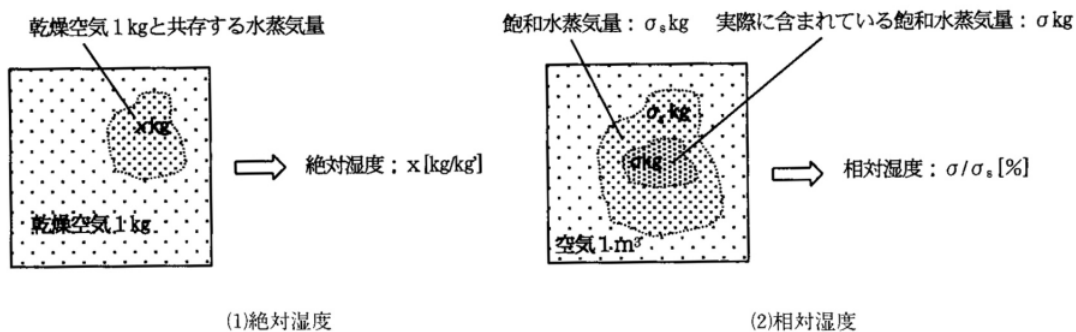


図 絶対湿度と相対湿度

結露：室内の空気が、壁面や窓ガラスに触れて冷却されることが原因で、空気中の_____が凝縮して露となる現象。

物体の表面温度が_____以下だと、結露を生じる。

露点温度：空気が飽和状態になったときの温度

教科書 p.60 の図 3 - 1 を参照のこと。

3.2 結露の種類

_____結露：物体の表面に生じる結露

_____結露：壁体や材料の内部で生じる結露

3.3 表面結露の生じやすい場所

- ・表面温度が他の部位よりも低いところ

教科書 p.61 図 3 - 2 「隅角部」や図 3 - 3 「冷橋」を参照

- ・暖房を行っている部屋につながる北側の非暖房室

教科書 p.61 本文左側 2 段落目参照

3.4 結露の防止策

(1) 表面結露の防止策

- ・室内で発生する_____の抑制
- ・_____による室内絶対湿度の低下
- ・_____強化による室内側表面温度の上昇
- ・直接加熱や気流促進による表面の昇温 など

(2) 内部結露の防止策

- ・ 壁体内部への_____の侵入防止

4. 断熱性能の向上の意義

4.1 断熱性能の評価

断熱性能を評価する項目の一つに_____がある。

熱損失係数：室内外の温度差が 1K ある場合，建物内部から外界へ逃げる単位床面積・単位時間当たりの損失熱量で，住宅の壁面，屋根面，床面，窓，扉等の貫流熱量と建物内外を出入りする空気失われる熱量を足したものの。

今日の講義の前半部分も参照

4.2 断熱性能向上の意義

- (1) _____の削減

- (2) 立上がり・立下がり特性

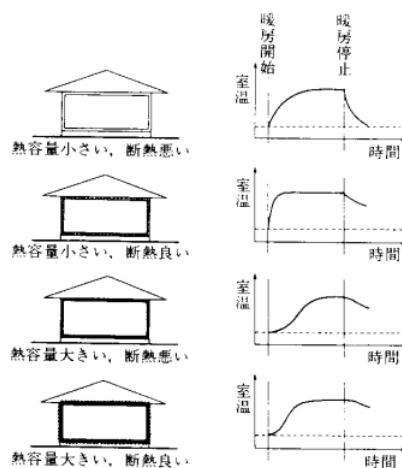


図 断熱性能・熱容量と暖房時の室温変動 (教科書 p.63 の図3-7)

同一熱容量の場合，断熱性能を向上させると，短時間で設定室温に到達する（立上がりが早い）。熱損失係数が小さく，到達時間も短いので，立上がり負荷は小さい。また，暖房停止後の室温低下が穏やか（立下がりが穏やか）である。間欠運転でも，室温変動が小さいと言える

- (3) 室内温熱環境向上

高断熱の居室における上下温度差は，通常の断熱施の居室における上下温度差の半分程度である（教科書 p.63 の図3-8 参照）。

5. 高気密化の意義

高気密：居住者が不必要を判断したときに隙間風の流入を防止でき、逆に必要と感じたときには窓等を開放して積極的に外気を取り入れることが可能な性能

窓等を閉鎖している時には、室内空気汚染防止のために適切な機械換気設備を備えること。

- 1) 隙間風を感じない、快適な室内温熱環境の形成
- 2) 断熱材の効果の維持
- 3) 壁体等における内部結露の防止
- 4) 計画的な換気
- 5) 汚染外気の流入防止
- 6) 遮音性能の向上
- 7) 窓回りの風鳴り音の防止

質問などは、下記の担当者まで

講師・辻原 万規彦

部屋：環境共生学部旧棟（旧生活科学部棟）4階西南角

電話：096-383-2929（内線 492）

e-mail：m-tsuji@pu-kumamoto.ac.jp

助手・香川 治美

部屋：環境共生学部旧棟（旧生活科学部棟）4階南側中央付近

電話：096-383-2929（内線 482）

e-mail：haru206@pu-kumamoto.ac.jp

配布資料は、下記のホームページでダウンロード可能。

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/m-tsuji/kougi.html/genron.html/setubigen.html>